

2019. 1. 10 (木)

人生はマラソンか？

難波 功 士

日を重ねれば賢くなるというのではなく
老人になればふさわしい分別ができるのではない。 (ヨブ記 32 章 9 節)

学期末や年度末には学部長が話すことが恒例になっていますので、何の話をしようかなと思って考えていました。

たぶんこの中に、1年生の人はほとんどいないとは思いますが、この年度の最初の入学式のときに、こんな話をしたということをごくここでお話して——1年生の人たちにとってみれば、「そんな話をしていたのだな」ということになると思います——その話をしてみても、いろいろ考えてみたいと思います。1年生の人たちには、「この1年を振り返ってみてどうだったかな」ということを少しでも考えてもらえたらと思って、今日はきました。

入学式の後、学部ごとに分かれての宣誓式は中央講堂だったので、スクリーン等々が使えなかったため、あるCMの話から話をしましたが、見せたほうがずっと早いと思いますし、今日は見せられる場ですので、最初に2分間ぐらいだけCMを見てください。この話をネタに、「そういう入学式のときに話をしていたな」と思い出してもらえたら、ありがたいです。少し長いですがけれども、見てください。

【動画ナレーション】

今日も走り続ける。誰だってランナーだ。時計は止められない。時間は一方向にしか流れない。後戻りできないマラソンコースだ。ライバルと競い合いながら、時の流れという一本道を、僕は走り続ける。より速く、一歩でも前に。その先に未来があると信じて。必ずゴールはあると信じて。

人生はマラソンだ。でも本当にそうか？ 人生ってそういうものか？ 違う。人生はマラソンじゃない。誰が決めたコースなんだよ。誰が決めたゴールなんだよ。どこを走ったっていい。どこへ向かったっていい。自分だけの道があるんだ。

自分だけの道？ そんなもんあるのか？ 分からない。僕らがまだ出会っていない世界は、とてつもなく広い。そうだ、踏み出すんだ。悩んで、悩んで、最後まで走りぬくんだけだ。失敗してもいい。寄り道してもいい。誰かと比べなくていい。道は1つじゃない。ゴールは1つじゃない。それは人間の数だけあるんだ。全ての人生が素晴らしい。

誰だ、人生をマラソンって言ったのは。

リクルートポイント始まる。まだ、ここに

ない出会い、リクルート。

2014年ぐらいのCMというか、この長さですので、テレビでオンエアされたというよりはネット上で、みんなウェブ動画として見ていた映像だと思いますけれども、リクルートというグループ全体の企業CMのような話です。

リクルートという情報産業は、人々のライフステージのいろいろなところで関わっていて、出産や進学、就職や結婚、いろいろなときに情報を提供してサービスして、それによって成り立っている企業体です。そのライフコースのいろいろなステージで出会うリクルートの全体で、ポイントがたまっていく仕組みを作りましたよというのが、今のCMのメッセージです。

「全ての人生が素晴らしい」「人生はマラソンではない」というメッセージが素晴らしいと、一部の人たちは反応しましたし、結構、国内外のいろいろな広告賞を取っていました。

確かに、俯瞰（ふかん）でマラソンランナーが町に散っていくようなシーンは、本当にすごかったし、そういう高い評価を得るのは当たり前だと思っていたのですが、私は最初にこのCMを見たときに、そのメッセージに少し違和感を覚えたという話をしました。違和感を覚えたときは、それが何かよく分からなかったのですが、ある漫画を読んだときに、あのCMに対して感じた違和感はこちらだったのだと分かった、という話を入学式にしました。

人生はマラソンではない、への違和感

『セトウツミ』という漫画は、誰がどこまで知っているか、ほとんど知らないと思いますけれども、こういう漫画があって、こちらの頭がツンツンとんがっている子が、瀬戸君で、眼鏡をかけている子が内海君です。瀬戸君と内海君という男子高校生が、放課後に川べりで、ずっと話しているというだけの話です。

内海君は、この後塾に行かなければいけないから、それまでの時間つぶしですし、瀬戸君のほうは、部活をやっていたけれども帰宅部になったので、放課後こうやって話をぐずぐずしているという漫画です。

私は、この漫画自体から入ったわけではなく、この漫画が映画化されたのを見て、映画を見に行こうと思って最初に興味を持ちました。その映画になぜ興味を持ったかということ、自分が土地勘のある所がロケ地になっていて、面白いなと思って見に行きました。

私は大阪市内で生まれて、小学校、中学校、高校と大阪府堺市という所で育ちましたが、ロケの場所が堺市の真ん中辺りなので、聖地巡礼ではありませんが、私は行ってみました。堺市内の高校に通っていたので、高校の同窓会が南海本線の堺駅近くのホテルであり、その少し先がロケ先だと知ったので、少し早めに行って写真を撮りました。

8巻の表紙のこちら側は、映画のロケ地そのままの風景を使っていると思います。

映画は、瀬戸君を菅田将暉さんが、眼鏡の内海君のほうを池松壮亮さん——先ほどのマラソンランナーをやっていた人——が演じていて、映画はそれなりに面白かったですし、ぎりぎり、まだ高校生にも見えまして、面

白いなと思って見ました。ただ中条あやみさんが堺市内の古い寺の娘という役をやっている、それは少しむちゃだなと思いましたが、それなりに面白い映画だと思いました。

ただ、その映画は、『セトウツミ』の3巻か4巻ぐらいまでのエピソードで作っていたので、放課後、男子高校生が2人でいたら話しているというだけだったのですが、8巻の最終巻ぐらいまでいくと、とんでもない、すごい漫画だったのだなと分かりました。

漫画を読んでいて、というよりは、おとしの暮れぐらいにドラマになって、8巻目までのエピソードを全部入れたドラマを見たときに、こんなすごい話だったのか、と思って、漫画もきちんと読んでみようと思い、全巻を買って読みました。

今日は『セトウツミ』がすごいという話ではなくて、『セトウツミ』のあるシーンを紹介したくて持ってきました。入学式でも、そういう話をしたと思います。

どういうシーンかという、ああやって川べりで2人が話しているところに、瀬戸君のおじいさんが現れて話に入ってくるというシーンです。瀬戸君の家は自転車屋さんで、おじいさんが始めた自転車屋さんをお父さんが継いでいて、3世代で住んでいます。でも、そのおじいさんは最近少し認知症が入ってきて、徘徊（はいかい）をし始めているという話です。

あるシーンの中で、2人は川べりで話すのではなく、LINEでやりとりをしているのですが、おじいちゃんが少し認知症なのは内海君は分かっているので、「おじいちゃん、元気なん？」と聞くと、瀬戸君は「玄関を開けたまま掃除していて、そのままどっか行った

わ」と返す。それで内海君は「ルンバやんけ」と返す。そういう会話をずっと2人でやっている漫画です。

ここに、小さくて分からないかもしれませんが、おじいさんが掃除機を持って町を徘徊していて「うわー」と言っている。そういうおじいさんなのです。でも、言葉は悪いですが、いつもぼけているわけではなくて、時々しゃんとしているときがあって、川べりで2人が話しているときに入ってきたおじいさんは、しっかりしているときのおじいさんだったというのが、このシーンです。

内海君が「こんにちは」と挨拶して、おじいさんが入ってくるのですが、内海君がいつもと様子が違うおじいさんに少しびっくりして、「今日は何かしっかりしてはる」というようなことを言うと、瀬戸君は「たまに自動でパフォーマンスが向上すんねん。アップデートみたいなものや」と言います。

そのアップデート状態のおじいさんが話しかけてきて、2人に「何の話してるんや」。2人は、将来や進路の話をしていたと言うと、「将来かあ」と言って、おじいさんは、こんな話をします。

「人生はマラソンだと言いだめた人がいて、今度は逆に、人それぞれに道があってゴールがあるから人生はマラソンではないという概念がカウンターとして新たに加わったんや」という話をするのです。

これは、どう見ても先ほどのCMを踏まえているとしか思えません。先ほどのCMの最初の1分間は、人生はマラソンだという話をしていて、後の半分は、コースもゴールも人それぞれなのだ、という話をしていきます。

しゃんとしているおじいさんが「こういう

2つの考え方があるんや」という話をし始めて、「でも、わしは思うんや」と言うのです。

おじいさんが何を思うのかというと、どちらにしても、マラソンであろうがマラソンでなかるうが、ゴールがいろいろなところにあるうが、走り続けられない限り、ゴールに到達しないというのはそうなのだ、どちらも一緒なのだ、ということを行います。

このシーンを見たときに、昔、あのCMを見たときの違和感はこれだったのだということをおもいました。おじいちゃんの言うことは正しいな、と思って私はこのシーンを読みました。

人生はマラソンであるにせよ、ないにせよ

おじいちゃんは話を続けていって、「君らみたいに、こうやってだらだら休んでいるのも、それはたまにはいいけれども、いつまでも休んでいたら恐ろしいバケモンがゆっくりと確実に近づいてくるんや。それも人食いのたちの悪いバケモンや。そいつに追いつかれんように、いくらへとへとになっても、歯を食いしばって走らなあかん。それを労働と呼ぶのか努力と呼ぶのか分からないけれども、しんどいなあ」というようなことを、おじいさんがおっしゃいます。

このシーンを引いて1年生に言いたかったことは、大学に入って、受験勉強も終わって休みたいし、遊びたいかもしれないけれども、少し休むのはいいけれども、休んでいると、こういうバケモンが追いかけてくるよ、という話をしたかったのです。将来を見据えて、どんどん新しいことを始めてください、ということメッセージしたくて、あの場で

はお話ししました。

漫画は、この先、おじいちゃんは、また普通のおじいちゃんに戻って、ふらっとどこかに行ってしまうところにつながっていくのですが、そういう話を、ほぼ1年前にしたなと思えました。

今日その話をしようかなと思っていたのは、あのときは、1年生に向けてということから引っ張りだしたのですが、自分の年という、瀬戸君や内海君や高校生のほうに自分を投影して考えるよりも、おじいちゃんの側に立って、ものを考え始めていて、おじいちゃんのことをいろいろ考えるのです。そういうことを今日はお話したいと思っています。

おじいちゃんのことを考えたときに、ここにも、やはり2つぐらいの考え方があると思います。おじいちゃんは、これまで自分で自転車屋を立ち上げて、いろいろ頑張ってきた、今はちょっとまだらげな感じかもしれないけれども、随分いろいろなことをやってきたので、それで十分尊敬されるべき存在だし、敬意は払われるべき存在だ、という考え方もあります。しかも時々、ピントが合っているときには鋭いことも言います。

先ほどのシーンでいうと、ピエロの格好をしていたパルーンアーティストの人は、おじいさんをおもすることで師匠だと尊敬し続けている設定で、おじいちゃんは、そのときそのときに残されている能力を駆使して、周りに影響を与えることもあるし、頑張って走り続けなければいけないともどこかで、しゃんとしているときには思っているような人です。

それまでやってきたことで十分評価されることをやっているのだから、それでいいのではないか、という考え方もあれば、いや、死

ぬまでということもないですが、最後まで自分の持っている能力を、どう周囲にうまく使って、少しでも役に立てるようなことができるのかと、2つの考え方があります。

後者の考え方だと、やはり「しんどいなあ」ということになるのですが、そろそろ、どちらを自分が取らなければいけないか、迫られる年齢になっているなど少し考えました。

結論としては、やはりしんどいのはしんどいけれども、最後まで、寿命が尽きるまで、自分の中に何か能力があって、それを必要とする人たちがいるのだったら、それを使って少しでも周囲に良い働きや影響を与えられたらいいなど、個人的には思います。

ただ、その考え方は成果主義などという話になって、企業などでも年功序列でそれまでやったことに対して給料を払うというのではなくて、そのときそのときの能力やパフォーマンス、挙げている成果によって、その人の評価をしなければいけないという、割とぎすぎすした考え方になっていくので、あまりよろしくないとも言われますが、

「ミッション」とともに生きる

しかし、そういう成果主義的な考え方は、外から成果を求められるのではなくて、自分で自分に、少しでもいい成果や、周囲に対していいことができるように、少しでも頑張り続けようと考えたら、決して悪いことではないとは思いますが。

昔、会社員をやっていたときも、今もそうですけれども、50~60代の人で、「俺は昔、こんなにすごいことをやったのだ。お前らは知らないだろうけれども、ちょっとは俺

のことを尊敬しろ」というようなことを言いたがる人が割といますね。そういう人たちを見ていて、かっこ悪いなと、ずっと思ってきたのですが、でも自分がそういう年になって、そのように言いたい気持ちも分かり始めています。そこで頑張ると、そういうことは言わないでおいたほうが、かっこいいかなとは思いますが、ただ自分で自分に、そういう成果を出し続けることを課すのも、自分で自分のパフォーマンスを評価するわけですから、どこかで甘くなったりするとも思っています。

今日こういう話をしようと思ったのは、グルーベル (Grubel) 先生が、今日で最後のチャペルなのです。グルーベル先生は私と同じ年に働きだして、20年余りの間で院長を9年もやられて、随分いろいろなことをたくさんされているので、「私は元院長だ」と言っていて威張って何もなくてもいいし、威張っているだけでも十分なのですが、そういうことはされずに、何かあれば快くいろいろなことをして、少しでも自分がここの組織の間は役に立てるようなことをしようと思えます。また、この春から離れられても、社会や周囲に対して何かできることをずっと考え続けられる方だと思いますし、関学にとっても何かできることはしていただけたらと思います。

そういうグルーベル先生のことを覚える会にしたいなと思ったことと、グルーベル先生がそのように頑張り続けられるのは、やはり信仰があるのだろうとは思いますが。神様がこの世に生を与えてくださって、ミッションを自分に与えてくださっている以上は、それを最後まで頑張り続けようと思われているのだろうと思います。

私は信仰がないのでどうしようかと思いますが、世の中はうまくできていて、私は今年で58になった後、閑学にいるのは10年ですが、子どもがまだ中2なので、あと10年は絶対に頑張らなくてはいけなし、やれることはやって、少しでも役に立って周囲の評価や働きに対する対価をもらい続けたいといけなし立場です。信仰はないけれども、しんどいなと言いながらも、自分に何かできることがあれば、無理をしない範囲で頑張り続けることをしていくのだろうと思っています。

最初に読んでいただいた聖書の箇所、ヨブ記の「日を重ねれば賢くなるというのではなく、老人になればふさわしい分別ができるものでもない。」も、自戒の言葉としてもっていたほうが良いと思ったので、この箇所を読んいただきました。

50代、60代の年を取った人たちは、「俺たちはすごい経験をしてきたのだ。お前らはもっと尊敬しろよ」ということを言いたがるし、昔は農村の長老などの経験が本当に人々の生活・暮らしや働きに活きるので、長老が「あそこの山に雲がかかったら、天気はこうなるぞ」と言ったら、みんなが「ああ、そうか」と敬われますが、この時代は50

代、60代の人々が持っている経験や蓄積などは、一言で言ってしまうと、使いものにならない世の中になっているという厳しい側面があります。

それが本当にいいのかということはありませんが、自分に対しては、新しい動きにできるだけ付いていこう、アップデートしていこうとし続けて、何かしらの働きを周囲にもたらすように頑張り続けるしか仕方がないと考えています。「俺はこれだけのことをやったのだ」「これだけの経験があるのだ」ということにふんぞり返らずに——そういう困った人を割と見かけたりもします。特に学問の世界、学会という世界に割といらっしゃるので、そういう人たちを適度に敬いつつ、適当に付き合いつつ、でも、ああはならないぞ、と頑張りたくないということを新年の抱負として今年は思いました。

そういうことを少しお話してみたいと思って今日は来ましたが、結論としては「グルーベル先生、お疲れさま」ということですので、グルーベル先生に、最後のチャペルをありがとうございますとの拍手をお願いします。(拍手)

(社会学部教授・学部長)